

いま必要なことは

うえ ひろ えい じ
上 廣 榮 治

テレビをつけたら、三人の大物政治家のインタビュ番組をやっていました。アナウンサーが問いかけます。「最近、子どもたちの痛ましい事件が立て続けに起きていますが、道徳面の立て直しについては、どのようにお考えでしょうか」。

地域社会が子どもを育てるようなシステムを構築しなければならぬと、まず、一人がおっしゃいました。学校などを地域に開放して、地域ぐるみで子どもの道徳心を育てたいというのです。

もう一人は、マザー・テレサの言葉を引用します。愛の反対は無関心である。社会が子どもに対して無関心であるからいけない。子どもの道徳面について、社会がもつと関心を持つようにしたい、と。「愛の反対は無関心」には、ちょっと驚きました。それがマザー・テレサの言葉だとは寡聞かぶんにして知らずに、同じことを申し上げたことがあるからです。

そして、最後の一人は、「家庭の復権」が大切だとおっしゃいました。お三方とも、立派なご意見に聞こえます。ただし、どなたのお言葉も、絵に描いた餅の感が否めません。なぜでしょうか。

まず、地域に開かれた学校といいますが、学校を開放して、どうしようというのでしょうか。開放していただくために変質者や生徒相手の業者が学校に入ってきたという事例なら、過去にたくさんありました。だからこそ、いま学校側は必死に門を閉ざしているのではないのでしょうか。

また、地域の大人たちが生徒たちに道徳心を付与するというのも難しそうです。ひとつの学区域に、道徳を教えられるほど立派な大人たちがそんなに大勢いたら、今日のような問題は起こっていなかったはずですよ。

「無関心を去れ」という指摘も抽象的でよくわかりません。社会が子どもに道徳心を持つようにするには、どういうことでしょうか。まさか、某テレビ局が毎年行なっている「愛」をテーマにした二十四時間番組のようなものが、毎日、どのチャンネルを回しても映し出されるような状態を、政府主導で実現しようというのではないでしょう。それでは自由な民主主義とはいえませんから。

問題の本質は、道徳心を失っているのが子どもたちだけではないということです。むしろ、彼らの鏡となるべき大人や社会が、道徳心を失っていることこそが問題なのです。だから、子どもの道徳心までが希薄になつてしまったのです。「学校の開放」も「無関心を去れ」も、このことを忘れていくように思われます。

最後の方がおっしゃった「家庭の復権」は、わが会の考え方に最も近いお答えです。しかし、家庭の復権とはどのようにして実現できるのでしょうか。ただ家庭の復権を唱えるだけでは、他の方たちと同様に、絵に描いた餅にすぎません。いま機能していない家庭を、どのようにしたら復権させることができるのか。どのようにしたら子どもに道徳心を育てることができるか。それこそが問題なのです。

では、わが会が同じ質問を受けたとしたらどう答えるのでしょうか。答えは明快です。「子どもの善導は親の倫理実践から」これしかありません。これこそが、六十年にわたって、その正しさを実証し、無数の実績を積み上げてきた、行なえば必ず実現する唯一の方法なのです。

倫理の実践、それはどんな家庭、どのような人であっても、いま、この瞬間から始めることができます。夫婦そろって始めれば、その家庭はたちまちにして立ち直ります。家庭が復権するのです。

親が倫理を踏んで、明るく正しく積極的に日々を生き抜いているならば、おのずと子どもたちは親を真似るようになるでしょう。人が正しい希望の実現を目指して真摯しんしに生きる姿は、誰の心も打つものです。特に、純真な子どもの心を揺さぶります。それが、愛する自分の親であれば、なおさらです。自分も両親を真似て、親に認められたい、喜ばれたいと切望するに違いありません。こうして子どもは、より善く生きる喜びを体感するようになるのです。

それに対して、あれをしてはいけない、これをしなさいという口やかましい禁止や強制は、多くの場合、子どもにとって有害です。

素直な子どもは禁止や強制に従おうとはしません。しかし、うっかり禁を破ってしまったら、何かの理由で強制に従うことができなかつた場合、それは取り返しのない失敗として、彼、彼女の心を傷つけます。素直で真面目な子ほど、その傷は深くなります。また、ものごとにとらわれない、好奇心旺盛な子どもの場合には、意に添わない禁止や強制に苦しみます。それが、せっかくの好奇心の芽を摘み取ってしまうことにもなりかねません。

まして、その禁止や強制が親の身勝手や利己心の押しつけである場合には、子どもに悪を教えているようなものです。それは、子どもの持つ純粹な倫理力を濁った雲で覆い隠してしまいます。

それだけではありません。子どもというものは、大人には想像もつかない誤解や曲解をしがちです。かつて、親からジョージ・ワシントンの美談を聞かされて、その真似をするという漫画がありました。ワシントン少年が桜の枝を折って、正直に名乗り出て褒められたという話です。これを聞いた子どもが、自分も褒められよ

うと、お父さんが大切にしている盆栽の枝を折って、「僕がやりました」と申し出て、叱られてしまうというものでした。

このように、口で道徳を説くのは難しいものです。やはり、「子どもの善導は親の倫理実践から」なのです。家庭だけでなく、学校でも、地域でも、社会でも同じことです。いかなる場合でも、子どもを善導しようとする人は、自ら「より善く生きよう」と実践している人でなければなりません。

親が倫理を実践している姿に触発されて、自分も同じように生きようとする。同じことが学校においても、地域においても、そして社会においても言えるのです。

道徳に外れたことを叱る教師が、常に自分の正義だけを人に強制する人間であったとしたらどうでしょう。子どもたちは自発的に道徳心を育てようとするでしょうか。あるいはまた、地域の大人たちが勝手な道徳論を振り回して子どもに注意し、自らは不道徳な姿をさらしているとしたら、はたして、子どもが言うことをきくでしょうか。自分は利己心のかたまりで、人に道徳や倫理を説く姿ほど、醜いものはありません。そして子どもは、それを敏感に見取るものです。

政治家であれ、マスメディアであれ、地域の人であれ、教師であれ、人に道徳や倫理を説く前に、まず、自らがそれを実践しなければならぬのです。大切なことは、一人ひとりが倫理を実践して生きることなのです。正しい人の生き方とはどういうものかを、子どもたちに見せてくれるだけでよいのです。

「子どもの善導は大人たち一人ひとりの倫理実践から」、これではなくてはいけません。社会の善導もまた同じです。とすれば、冒頭の社会のリーダーたちに対する質問は、次のようなものでなければならなかったのです。「最近、子どもたちの痛ましい事件が立て続けに起きていますが、あなたは倫理を実践なさっていらっしゃるか？」